

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	荒船俊太郎
論文題目	「元老制」変容過程の研究―「元老待遇」の形成と「一人元老制」への展開―
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、明治期に形成された薩摩・長州両藩出身の長老政治家による集団的な指導体制を「元老制」と規定し、これがいかに西園寺公望に体现される昭和戦前期の「一人元老制」に収斂していったのかを解明することを通じて、近代日本における政治構造変容のメカニズムを考察しようとしたものである。主たる対象時期は、第二次西園寺内閣の崩壊後、西園寺公望が「元老待遇」に位置づけられた1912年から、1922年の大隈重信・山県有朋の死去を経て、1924年の松方正義の死去に至る期間である。全体は、およそ時間軸にそって構成された5つの章と補論からなっている。</p> <p>すなわち、第一章では、大正政変を機に政界から引退した西園寺が、山県・松方に次ぐ地位に浮上することによって、「元老制」が再編されていく政治過程が考察される。そこでは、従来型の元老たるべきことを西園寺にもとめる山県の思惑と、政友会とのパイプ役を維持しようとする西園寺との駆け引きが明らかにされる。</p> <p>第二章では、大隈の元老加入問題をめぐり、寺内内閣期から原内閣期にかけて生じた「元老制」の動揺が検討される。そこでは、大隈を通じて憲政会を取り込もうとする山県と、憲政会の政権参入を意図しつつ大正天皇の信任を梃子に山県との駆け引きを展開する大隈との関係が検討され、「元老待遇」としての大隈が占める位置の意味が明らかにされる。</p> <p>第三章は、「元老待遇」大隈が、宮中某重大事件による山県の失脚を機として攻勢に出、摂政の就任によって「摂政宮の元老」となっていく経緯の考証にあてられる。すなわち、これによって大隈は山県・松方・西園寺とならぶ元老になったとされる。以上の3章の分析によれば、明治期に形成された「元老制」は、「政友会の元老」西園寺と「憲政会の元老」大隈の参入によって、大きく変容していったことになる。しかし、大隈・山県の相つぐ死去によって、この「元老制」にもさらに再編が迫られた。</p> <p>第四章は、山県・大隈没後の「元老制」の分析にあてられるが、ここでは、宮中で主導的地位を獲得した松方の動向と、松方・西園寺両元老のもとで進む政界再編の様相が分析される。とくに、松方・西園寺による「二人元老制」に着目しつつ、松方の政治的な役割に独自の検討が加えられている。</p> <p>第五章は、第四章と重なる時期の西園寺の動向に注目して、日支郵便約定諮問問題を通じて西園寺が「単独輔弼」という「元老制」の新たな運用に踏み出そうとしたことを重視する。そこに以後の「一人元老制」への転機をみるからである。</p> <p>さらに補論では、大隈の陞爵・国葬問題の政治過程が検討され、「複数元老制」から「二人元老制」へ向けての政治構造流動化の様相が明らかにされる。</p> <p>以上のような内容からなる本論文の意義は、第一に、これまでほとんど本格的には検討されることのなかった大正期における「元老制」の実態に分析を加え、これによって元老研究に重要な貢献をなしたことにある。とくに先行研究に対して元老か否かを二項対立的にとらえる傾向が強かったとの批判的見地を対置し、「元老制」を「絶えず再編成を繰り返しつつ変容し続けるシステム」と規定して、これを動的に把握しようとする観点を強く打ち出したことは高く評価される。分析の結果、元老＝「薩長藩閥」という既存のイメージの刷新をはかった意義は大きい。</p> <p>第二に、元老西園寺と立憲政友会の関係は言うまでもないことながら、「元老待遇」であった大隈の存在や元老松方に注目することによって、憲政会と元老との関係を浮かび上がらせ、これらを通じて元老と政</p>	

党との連動現象を明らかにするなど、元老と政党勢力との関係に関して新たな見解を提出したことが注目される。これによって、元老の機能を政党に委ねていくという、昭和期の「一人元老制」への見通しをつけたばかりでなく、政党政治形成過程における当該期の独自の構造を明らかにしており、政治史研究を更新する重要な成果となっている。

第三に、西園寺公望・松方正義・大隈重信などの政治動向やその位置づけに新たな知見を加えた意味も大きい。いずれについても、その政治的な能動性やしたたかさが強調されており、実証の成否については議論があるにせよ、この期の各人に対する既存の評価・イメージを一新するものとなっている。その意味で、元老研究にとどまらず、今後の各政治家に関する人物研究にとっても、重要な問題提起をなすものと言える。とくに大隈の政治手法に関する分析や、松方の政治家像の刷新に関する考証は刺激的である。

第四に、元老層の動向や内情を示す史料がはなはだ希薄であることがこの時期の元老研究のネックとなってきたという厳しい史料状況を打開すべく、史料の博搜と丹念な発掘につとめ、また、新聞史料などを活用することによって状況証拠をかためて、実態の解明に迫ろうとしたことの意義は大きい。

ただし、以上の成果の反面で、分析が人的関係、個人的手腕、政治的駆け引きなどの追究に収斂される傾向が強く、政局史的分析に傾斜していること、国内の政局動向・政治構造には関心が向けられるものの、当該期の日本国家が直面していた国際環境・国際政治とのかかわりが捨象されていることなどが問題点として指摘される。さらに、変容を問題とするにもかかわらず、その前提となる明治期の「元老制」に対しては、既存の研究の要約にとどまって、批判的な検討や独自の提起がなされていないこと、他方、変容の帰着とみなす「一人元老制」についても、成立・移行のプロセスが分析されておらず、終章のまとめでごくわずかに言及されるにとどまっているといった問題点も指摘される。

しかし、これらはいずれも論者の今後に期待される課題であって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに十分にふさわしいものであると判断される。

公開審査会開催日	2013年12月 4日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学・教授	博士（文学）早稲田大学	大日方純夫
審査委員	早稲田大学・教授	博士（文学）京都大学	鶴見 太郎
審査委員	早稲田大学・准教授	博士（文学）早稲田大学	真辺 将之
審査委員			
審査委員			